

# 著者の旅の曲



サツとひと拭きする前に

Tanaka Machi

文・写真：田中 真知

イラスト：bozen

【プロフィール】1960年東京生まれ。作家・翻訳家。1990年より1997年までエジプト在住。著書に『アフリカ旅物語』（北東部編・中南部編、凱風社）、「ある夜、ピラミッドで」（旅行人）、訳書にグラハム・ハンコック『神の刻印』（凱風社）、「惑星の暗号」（翔泳社）など。



## エジプト

に暮らして

た頃、アルバイトで日本人観光客相手のガイドをしていたことがある。その際、レストランに入ると、よくお客さんから「生野菜を食べても大丈夫ですか」と質問された。

ぼくはふだんから市場で買った生野菜を食べていた。エジプトの野菜の多くは日本のものにくらべて味が濃い。とくにトマトやニンジンなどは、野性味のある青臭さが郷愁をかきたてた。だから、いつも当然のように「大丈夫ですよ」と答えていた。ところが、あるときそれを聞いていた添乗員から、「困りますね。お客さんにはエジプトでは生野菜はいっさい食べないようにいつてあるんですよ」とたしなめられた。しつこく注意を受けていたのか、そのグループの人たちは、最高に美味しい搾り立てのオレレンジジュースにすら口をつけようとしなかった。

たしかにエジプトでお腹をこわすお客さんは少なからずいる。現地に住んでいても、夏になると一度や二度は腹を下してしまうことはあった。しかし、それは食べ物のせいと

いうより、むしろ暑さなどによる疲労のためであるように思われた。まして、ツアーでやってくる人などは20時間も飛行機に乗ってきて、そのままほとんど一睡もすることなく炎天下の砂漠へと観光に向かう。寝不足と疲労、そこに慣れない食事でお腹の具合をおかしくしてしまうのも無理はないと思う。

とはいえ、あらゆるリスクを避けようとするあまり、いっさいの生ものには手をつけないのは行き過ぎではないか。現地スタッフが気をきかせて持ってきた新鮮なナツメヤシの実にまで、まるで汚物でも見るような視線を浴びせるのには、正直やりきれないものを感じた。

ところで、こうしたツアーが終わると、日本から持ってきた不要な荷物をくれるお客さんもいた。主にちよつとした日本食や雑誌などであるが、海外に住む身にとつて、これらとてもありがたかった。

けれども、ある時期から、その中に妙な品が増えてきた。いわゆる抗菌・除菌グッズの類だった。その頃、ぼくは日本に抗菌ブームとでもいう風潮が広がっているの知らなかつ

た。だから、このような見慣れぬ品をほとんどの人たちが持っているのが不思議だった。そうした品を現地の人にあげているお客さんもいた。あとで便座除菌ペーパーをもらったエジプト人から「これは何だ？」と訊かれて、説明に窮したことがある。

清潔や衛生に気をつかうのは悪いことではない。しかし、自分の周りの異物をことごとく排除しようという発想は、やはり不自然だ。除菌ペーパーで拭かなかつた便座に腰かけたばかりに死んでしまった人がいるのか。抗菌処理されたポイルペンがなかつた時代、そのため手が腐つた人がいるのか。あるいは不幸にして、100万人に1人くらいそんな人もいたかもしれないが、ほとんどは大丈夫なのではないか。

抗菌・除菌への執着は一種の脅迫観念だ。それは、目に見えない脅威があなたを待ち伏せていますよ、それに備えないとたいへんなことになるですよ、という脅しにほかならない。そんなふうにあおるような傾向は、危機感ばかりをあおるような傾向は、どうにも胡散臭い。

抗菌グッズくらいならまだいい。

カイロ下町の商店街。布、服、香料、貴金属などさまざまな店が軒を連ねているが、品揃えはどこも似たり寄ったりだ



しかし、日本に暮らすようになって、この国に生きるというのは、あらゆる脅迫観念に晒されることだという事実を痛感した。事故にあつたらどうしますか、病気になるたらどうしますか、急死したら家族はどうなりますか。子どもの勉強はだいじょうぶですか、落ちこぼれたらどうしますか、いじめられたらどうしますか、老後の備えは大丈夫ですか、年金は大丈夫ですか、ボケたらどうしますか、お墓はどうしますか等々。数え上げればきりがありません。じつはこうした脅迫観念こそ、日本を覆い尽くしている膨大な情報の背後にあるイデオロギーなのではないかという気さえしてくる。

要するに、自分がいまここに在るというだけでは、存在していることにならないのだ。いまここにはないあらゆる危険や困難を想定して、おびたらしい予防線を張って、はじめて人は安心して存在できることになる。しかし、ほんとうに恐ろしいのは、そんなイメージを小さい頃から無意識のうちに植え付けられ、予防線のない人生など不安で恐ろしくて考えられないと思いきんでしまうことではないか。それは結局のところ、生身の人間を脆弱な無力感の淵に追い込んでいくことにほかならないのではないか。

旅で目を開かれたことの一つは、世の中にはなんといろいろな人生があるものかという驚きだった。とくにアフリカなどでは、道ばたの物売りの子のあどけない顔の背後に息をのむような壮絶な人生が隠されていることを知って、愕然とすることも少なくなかった。

もちろん、それはけっして自分の望んだ生き方ではないかもしれない。それでも否応なく彼らは人生のはらんでいく途方もない振幅を受け入れ、その中を泳ぎ渡っていくためのノウハウを身につけていく。そんな彼らの生にふれると、人間とはどんなふうにも生きていけるたくましい存在なのだなどとあらためて感じ、こちらもまたその力強さに突き動かされる気がしてくるのも事実だった。少なくとも異物を除菌クリーナーでサッと拭きとるような生き方からは、彼らが放つような生命力の輝きはけっして生まれて来ないだろう。